

東京 肝臓のひろば

平成 28 年 (2016 年) 2 月号 第 210 号

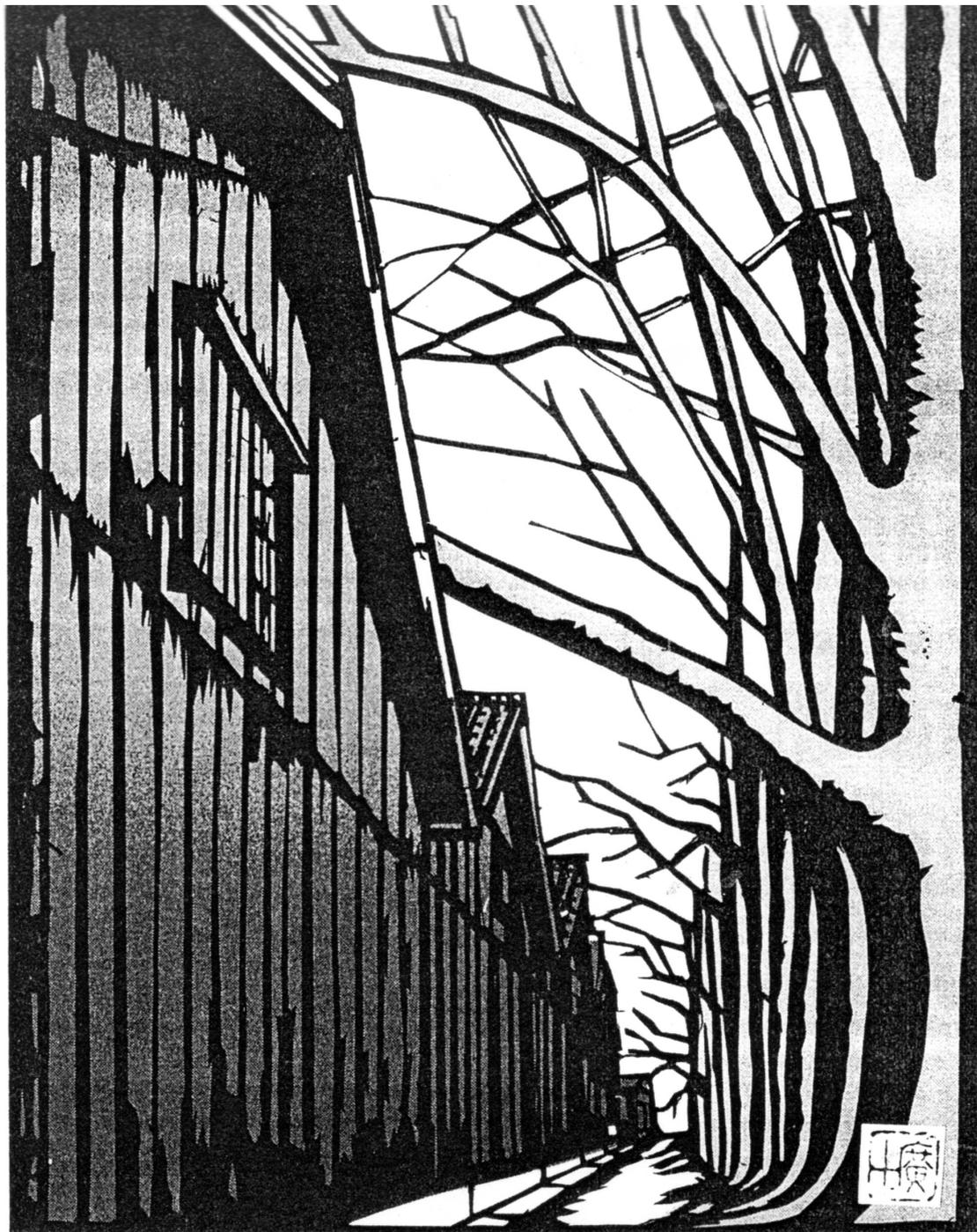
特定非営利活動法人 東京肝臓友の会

〒161-0033 東京都新宿区下落合3-14-26-1001

電話 (03) 5982-2150 振替 00120-6-40564

FAX (03) 5982-2151 口座名 東京肝臓友の会

<http://www.tokankai.com>



山居倉庫(さんきょそうこ) —山形県・酒田市— きり絵・佐藤廣士さん

会員のみなさん、読者のみなさん

今年も国会請願署名にご協力を



日本肝臓病患者団体協議会は今年も国会請願署名を取り組みます。請願項目は①ウイルス性肝硬変・肝がんに係る医療費助成制度づくりを早急に検討し進めてください。②既に着手しているB型肝炎ウイルスを排除する治療薬等の研究開発を加速してください。③潜在する肝炎患者・感染者の早期発見と適切な治療のため、肝炎ウイルス検診を更に促進し、陽性者を受診・治療に結びつけるフォローアップ施策にいつそう力を入れて下さい。の3項目です。ここ数年でC型肝炎は著効率の高い経口剤が登場し、多くの患者がウイルスを排除しています。非常に高価な薬ですが、医療費助成制度が適用されています。しかし一方この新薬の恩恵を受けられない肝硬変、肝がん患者がたくさんいます。完治する患者には助成制度が適用され、完治が見込めない肝硬変、肝がん患者には助成制度がないという理不尽をなんとかして改善する必要があります。また、B型肝炎は現在ウイルスを排除することができません。一刻も早く実現させなければなりません。

昨年、国会では与党による肝炎対策推進議員連盟が発足しました。多くの議員が肝炎対策に理解を深め、実現のために力を尽くしていただくこ

とは非常に重要です。この機会をとらえ請願署名運動もぜひ、成功させましょう。ご家族、ご親戚、友人、知人にお願ひし数名でも結構です。同封の返信用封筒に切手を貼り4月15日までに東京肝臓友の会へ送ってください。お手数をおかけしますが、どうぞ皆様のご支援、ご協力をよろしくお願ひいたします。



「街頭キャンペーン」に参加しましょう！！

肝炎ウイルス検査の受診を呼びかける「街頭キャンペーン」を、今年も以下の要領で実施します。いまだに、肝硬変になって初めて、ウイルス性肝炎であることを知ったという人がいます。患者自身が肝炎の恐ろしさやウイルス検査の重要性を訴えることは、大きな意味があり、私たちの重要な啓発活動のひとつです。今回で10回目となります。ぜひ、皆さんの参加をお待ちしています。

肝ちゃんも来るよ！

日時：3月13日(日) 12時30分から

場所：都立上野恩賜公園 (JR上野駅公園口をまっすぐ進み、東京文化会館の先、テントに集合)

自己免疫性肝疾患の診断と治療

～現況と問題点～



【日 時】 2015年6月27日(土) 14:00～15:40

【場 所】 東京都健康プラザ・ハイジア 4階研修室

【主 催】 東京肝臓友の会

演 者

国際医療福祉大学 臨床研究センター
山王病院 銭谷 幹男先生

今講演録は昨年6月に行われた東京肝臓友の会主催による講演会の内容です。掲載にあたりお忙しい中ご監修いただいた銭谷先生には紙面にて厚く御礼申し上げます。

司会 ではPBC、AIH、PSC医療講演会を開催いたします。本日はお天気もすぐれないところをお越しいただきまして、ありがとうございます。今日は銭谷先生による講演会が1時間ほど、そのあとに質疑応答の時間を設けます。休憩を挟んでPSC、AIH、PBCのグループに分かれて、それぞれ交流会を開催いたします。その中に銭谷先生も順番に加わっていただきます。いろいろなお話をさせていただきます。と思います。

まず、事務局のほうから一言ご挨拶があります。

事務局(古川) 今日の講演会を主催しておりますNPO法人東京肝臓友の会事務局の古川と申します。会員さんにご存じだと思えますが、私どもNPO法人は、患者会として活動しております民間の団体です。

●もくじ

請願署名のお願い	2
街頭キャンペーン参加のお願い	2
講演 「自己免疫性肝疾患の 診断と治療～現況と問題点～」	3
国際医療福祉大学 臨床研究センター 山王病院 銭谷 幹男 先生	
PBC・AIH・PSC通信	31

ジコメン・メディカル(医療情報)No.31	31
東京肝臓友の会 活動日誌	32
.....	
情報BOX	33
患者会からの行事案内 医療講演会のお知らせ 書籍紹介	

ウイルス性肝炎の会員さんが全国に2,000人近くいらして、私たちの仲間、自己免疫性の肝臓病の会員さんは20人ぐらい全国にいらっ

しゃいます。今日も遠方からいらしていただいていますけれども、そういう活動をしている患者会です。

毎年、銭谷先生に講演をお願いしております。今年もぜひということとで、今日開催の運びとなりました。

銭谷先生は今年の3月で東京慈恵会医科大学病院を退職され、現在は山王病院で診察をされ、国際医療福祉大学の教授でもいらっしゃいます。今日は新しいお話もお聞かせいただけるといふことで、楽しみにしております。先生、よろしくお願ひします。

1. はじめに

銭谷 皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました銭谷でございます。いつも1時間でAID(自己免疫性肝炎)とPBC(原発性胆汁性肝硬変)とPSC(原発性硬化性胆管炎)を全部話すように言われてなかなか

か難しいのですが、今日は皆さんに役立つことを最初にお話ししようと思ひます。

この3つの病気はいずれも自己免疫性疾患で、自分の細胞に対して免疫が起こる。通常は、外から入ってきた例えばバイ菌に対して免疫が作動するので自分には働かないのに、自分に働いてしまうのです。免疫応答というのはいろいろなこ

とが起こるのですが、自己免疫性肝疾患は肝臓に特異的な自己免疫反応を起こします。つまり臓器特異性というのが非常に大事です。自己の細胞というのは腎臓にも肝臓にも脳にも胃にもあるから、どこに対しても自己免疫現象が起こると思ひけれども、肝臓という臓器だけです。自己免疫性肝炎は肝細胞だけ、PBCは小葉間胆管だけ、PSC

Cは肝内外の胆管だけと、標的がきちんと決まって免疫応答が起こるわけです。この免疫応答の異常については、皆さんに以前協力していただいた遺伝子解析によって、約20個の遺伝子が関係しているとわかってきました。しかし、わかったからといって、すぐに治るわけではないのです。複雑に絡みあっている

ので、どう料理して正常な反応に持っていくかを研究しなければいけません。

皆さん、肝臓というのは肝細胞からできていると思うでしょうが、肝細胞は肝臓の実は60%で、ほかに血管の内皮細胞やリンパ球が肝臓の中に入っています。肝臓の中に入っているリンパ球は、末梢血に入っているリンパ球とは全く違って、ナチュラルキラー(NK)細胞、ナチュラルキラー(NK)細胞、ナチュラルキラー(NK)細胞とい

うのが非常に多い。通常我々に流れている血液にはNKやNK細胞はあまりなくて、T細胞やB細胞、それから好中球がいっぱい入っています。しかし肝臓の中のリンパ球は、ほかのリンパ球と違う。なぜ違わなければいけないかということもお話しします。

要するに自然免疫とかに関係している、免疫を調整するNK細胞やNK細胞が肝臓にはうんと多い。なぜかという、皆さんはいろいろなものを食べますね。新しい着色料も新しい食べ物も、異物として体に入って腸から吸収されて肝臓に入ります。つまり肝臓は内臓だけれども、食べ物を通して外部に接し

ているわけです。そこで毎回異物が入ってくるたびに反応していたら病気になるってしまいます。必ずしもアレルギーが起きるわけではありません。

言葉を変えれば、肝臓は炎症を起こしにくい臓器なのです。外から異物が入ってきてても炎症を起こさない。これは肝臓の移植をしてみてもわかりました。ほかの臓器を移植するときには必ず拒絶反応が非常に強く起こります。ところが

肝臓だけは拒絶反応が比較的軽い。血液型が不適合でも移植できる臓器は肝臓だけです。移植後に免疫抑制薬が要らなくなる臓器も肝臓だけです。しかも肝臓の移植と一緒にいけると、ほかの臓器の移植でも、つきやすくなる。肝臓には免疫関与、免疫反応を抑制する働きがあることが移植をしてわかってきたわけです。

この会員さんも含めてウイルス性肝炎の方は日本にもいっぱいいます。ウイルスに慢性に感染しているという事は、つまり肝臓の反応が弱いから拒絶できないのです。ほかの臓器では、慢性ウイルス炎症はあまりないですね。肝臓に

(5)

ウイルスが入っただけで炎症が長く続くのは、免疫を抑える働きがあるので免疫応答が起こらないという肝臓の特徴も理由になるわけです。

実際、肝臓に多く存在するNK T細胞は、Treg(制御性T細胞)を介して免疫調節をしています。末梢血のリンパ球とは違って、肝臓のリンパ球ではNK、NKTがいっぱい入って免疫を調節していることがわかっていきます。NKTは細胞障害に直接・間接に関係します。ということ、これは自然免疫に係るわけですから、免疫を抑えるNKT細胞が変調をきたすと病気が起こるのではないかと。ということとは、僕は自己免疫性の肝疾患を考え、病態の調節をするときに、肝臓に多いリンパ球を調整すればいいのではないかと最近考え始めました。この辺が今後の治療の観点です。今は起こった免疫応答に対して免疫を抑制するステロイドを使っているけれども、特異的に免疫を調整する、しかも肝臓内だけに多いリンパ球をうまくコントロールすれば今後の治療につながるのではないかと思っただけでも今研究

しているわけです。

まとめますと、肝臓は、免疫学的に非常に特徴的な臓器です。肝臓に含まれているリンパ球が違ったり拒絶が起こらない。口からいろいろなものが入ってきてもアレルギー反応を起こさない。肝臓には慢性感染が成立しやすい。

もう一つ、特徴があります。普通の臓器は、動脈から栄養と酸素を得て静脈から排泄していますね。普通の臓器には動脈と静脈しか血管がないのだけれども、肝臓の動脈には動脈と門脈の2つがあります。しかも門脈の血流が8割です。普通の臓器は100%動脈で栄養されているのに、肝臓は門脈で80%栄養されている。この門脈は、腸が吸収した栄養を集めて肝臓に全部流している。要するに、私たちが食べて、胃でこなし小腸で吸収すると、吸収した栄養は小腸管の静脈が門脈となって肝臓に全部入るので。例えばお薬を飲むと、吸収された成分は門脈を伝わって必ず肝臓を通ってから全身に回るとい話です。しかもこの門脈には必ず脾臓の血管がくっついていきます。脾臓は体の中で一番大きいリンパ組

織です。ですから炎症が起こると脾臓が腫れます。脾臓のリンパ球がうんと活性化して、リンフォカインとかサイトカインというものをいっぱいつくります。これらが全身に回るとものすごい炎症になるのですが、これもいったん肝臓を通ることで免疫の鎮静化が行われる。ということ、肝臓に病気があって、

脾臓がほかの炎症を起こして腫れて問題を起こすと、肝臓の免疫は変調するわけです。そういうことも覚えておかなければいけない。

ですから解剖学的、生理学的に肝臓という臓器の特異性を知ることが、肝臓の病気を理解する上で非常に大事です。ちょっと難しいのですが、肝臓の臓器特異性を理解していただきたいと思えます。(図1)



肝臓は免疫学的に特徴的な臓器である

- * 特徴的な免疫担当細胞構成を有す
- * 肝移植では免疫抑制剤非使用でも拒絶が少なくHLA不適合でもうまくいく
- * 肝と他臓器の同時移植では、他臓器に対する拒絶が少ない
- * 腸管由来抗原に対する経口免疫寛容に関わる
- * 門脈内に投与されたアロ抗原に対する寛容が誘導される
- * 肝臓には慢性感染が成立し易い。
- * 末梢の活性化リンパ球が非特異的に集積、免疫反応の終息が起こる。
- * 最大のリンパ組織である脾臓からのサイトカインが通過する

など、など……



こうした免疫学的特徴のある肝臓に自己免疫が起こるので

やすく拒絶反応も起こりにくい、つまり免疫が起こりにくい肝臓に、臓器特異的自己免疫反応が起こるというのものはものすごく特殊なことです。通常は起こらないことが起こるわけです。ということは、肝臓の免疫が非常に大きな障害を受けているはず。だから皆さんは免疫全体を抑えるような薬を使わ

東京肝臓友の会 主催 医療講演会 B型C型慢性肝炎、肝硬変 新しい治療の効果と今後の展望

2016年 3月26日(土) 13:30~15:40

プログラム

- 13:30~14:20 「B型C型慢性肝炎、新しい治療の効果と今後の展望」
講師：溝上雅史 先生（国立国際医療研究センター国
府台病院 肝炎・免疫センター長）
- 14:20~14:40 質疑応答
- 14:50~15:20 「肝硬変の予防と最新治療について」
講師：木村公則 先生（都立駒込病院肝臓内科部長）
- 15:20~15:40 質疑応答

会場

全電通ホール

(千代田区神田駿河台3丁目6)

中央・総武線・御茶ノ水駅聖橋口出口徒歩5分

東京メトロ千代田線・新御茶ノ水駅B3 出口徒歩 5
分東京メトロ丸ノ内線・淡路町駅A5 出口徒歩 5分
都営地下鉄新宿線・小川町駅A7 出口徒歩 5分

お申し込み

事前登録制ですので、電話・はがき・FAX(裏面)
のいずれかで、住所・氏名・電話番号・希望人数を
明記の上「東京肝臓友の会」までお申し込み下さい。



主催：NPO法人 東京肝臓友の会

〒161-0033 新宿区下落合 3-14-26-1001

TEL 03-5982-2150

(火曜~土曜 10時~16時 ※祝日を除く)

FAX 03-5982-2151

後援：東京都、一般社団法人 日本肝臓学会

東京肝炎フォーラム

入場無料

定員 300名